孝経日注解 乾

中村俊定文庫
文庫 18
753
1

俊定藏

一ふたつあるものも
おなじ
海をへだてゝ
ながらせるのとて
たゝえて高津
宮の世嘉山を
より
深淵を探りて

あるは詩歌文質をとゝのへ歌
は花鳥をうたひ明晴をたゝ
一ゝ山道はあるゝなる
雅なるもやかの山
ゝの書義よりうつる
といふ形色もさるあり
色をいとゝ
みの地蔵をとりて

元禄俳諧集

貞享八年酉辰初冬

武藤文庫
無疆之印

自序

[illegible]

一茶坊主話の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

不[illegible]解[illegible]読[illegible]
[illegible]此白乃附[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

凡例

一此書ハ予ノ門弟初心ノ学者ノ為ニ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ノミヲモテ[illegible]
取テ文章ヲ[illegible]

一[illegible]ノ[illegible]

一学者ノ己ノ学ヲ[illegible]
[illegible]ヲ門弟ノ[illegible]
[illegible]

宮城県図書館蔵

冬の日注解乾

浪花　黄華庵升六著

中村俊定文庫

笠とる途の雨よわるひかりかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

狂句の二字

[illegible]公の論ずる所和の題[illegible]
の俳諧[illegible]一紙一巻[illegible]
[illegible]句解[illegible]
[illegible]の作[illegible]
国の[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるの余りさまざまの筆て等人々て又蔡太七郎撰す狂句
の二字或人々の口一部の主味なるやうまれいくと思て蒼白居
奇を古人と陸文詞書も狂句の才士と行るれよわくるの
所なるかるる所由なれいてるうるまく外面も狂句を
我も狂句をりよ風人ぢやとるすてんるん語近のところに人を
ものるるきくとりてるり此解んれかて外しる外語をみる
るきいうるるる人をもなるれるも友人をもい謡近
ちて狂句の才士とはやされるるるの教句を表
句を出なるる狂句くとれる語近して己の宗とるる道を曲て
狂句とるるる翁又とい歌くれて元をるるの氏を中るる正
風を無一るるる言中るるいるい語近ちれいるるを
を改るて彼るる語るる道近ちるるるるるや中るるて抑狂句の二字

を無るるるる詩抑るる抑詩ちる氏を不狂句ちれを行句を
連句る抑狂句ちるるるやるるるるるる句の行言必を味あ
てるれる不翁るて此義句の俗と行るるる一句狂るれいるるを
を狂句るるる句るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
時い言もる細の行るるるるるるるるるるるるるるるるるる
ものるるるれるも狂句の二字い句まるるる狂句とるるるるる
を別るる言ちる行るるるるるるるるるるるるるるるるるる
狂句の二字を除る行るるるるるるるるるるるるるるるるる
後行るる門人等狂句の二字を除て家る出るるるる七郎
撰るも爺近化の後門人等狂句の二字を除て家る出るるる
又面白るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
狂句るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

[illegible]て此二字を一句とゝ[illegible]ゆゑ[illegible]
[illegible]○次に浮世の[illegible]当時天下の作者寄を求んとして
再て浮世をゑんものゝ[illegible]
[illegible]浮世[illegible]句[illegible]
[illegible]の[illegible]助詞[illegible]
を[illegible]の助[illegible]
の[illegible]浮世[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

有明の[illegible]水小河原つくり　荷兮

此才三[illegible]水と云を人偏と[illegible]白の竹[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を訓んを悪しの義なれば又の説は方角なり
月を持ちん汁りの粉くとも切り此説稍よ中ゆれども未
理故なきに為て為り此月をとなへきれども切れ
此方角なる水の名よりて計らをうりて赤おりしなれを
作者のおもひて方角と云ふなれば五文字を略りし一句
なけれども為りて侍り性よ有三と成るも方角の詞
なり居りなれば附きに云ふ笠の風和人抜の方
侍るべきなるべし

かしらの雪を掃ふ白むま　重五

此句を為るを為て西方の行ひを行ふなれば作者の骨折
故なりと云へり此句の白の字を附事なれ
ども白の字は花を附事なれ
ども詞よ花鞍を体して為り

すべきなるべし雪よ故人の骨折り白小説を入るを為
し丈を赤なと高なるい前白のなりて高も一句平
寂なり

朝鮮のおもり落り白ひなさ　杜國

雪を為るの行脚辺の落と解する人もなれども此句
西方行れを塔と為りて為れなる白のなる小
なを答りて雪の高なり落り附なるなるに
一句よ塔なる朝鮮すれば芭の移れと白ひなきに
なけなさと為なる旭少月小花なるなれば高
白小花なるなれば高

日はちりくるや耶子　米を刈　正平

此句稲刈りなる子きを米を刈を作りなるなるし
雪なるなの風流と米を刈と一句和して作りなるもの

米をもつくり稗をもかりて作りあれば秋とは呼もかまくるなり說
なれども挙て益なし　禁令れば男一人仕事といふ白の芒の小
なびきあれとなりうゝ扱い秋も央るころとなんて米を刈とは作る
ほうゝ蒔とを動さんしてのちゝくらを作るなるべし

わゝ屋い語ふやとうれあるうみて　野水

此白屋の葉そそうはるくらの森よりあふ
寂しき実ふ妙こ不静なり作りて書を者うと作りるそ
俗語の文章ちうゝ我者るくきくを語の森うあるとう
のうゝふ作りて文章ちくしも風情落しく作ちくきるよ
こと語ふ芭蕉門とちうゝる俗士のうちも俗語ふ俗語平話こ少
のこひくをよんを扱く俗語平話を正さん為ふ為ふ
こうゝ我用ひたくはるうゝ業のり我こくとふうゝ

風雅ふ文章のうくとりつること我ちくさうふ学ふ手さ扱り既支
考の十論ふ文章を設して啓り乾坤の千来ちるもちるいふ
字のかりるしとしちくと百枝書送るも人のんの高新く
まきを浅茅ふ宿よこ思ひ出ふ井のよふふ扱もひやて
とい人を動うんうふ平ふ乃ちやこ浅茅も雪井も自の月行う
やこうちうりやこのたやこと云い行うのを刈文章ふこを
蕉く蕉門の俗語ふ俗語ふ俗貸ふこと白乃文章いくひも
味ふくし　附こいくく寂しき屋ふ住る人の住ふ思くちれ
まにたやて我蕉屋ちくうきたけて聖つうのうきを脱
世したうと附うう扱ふ白の学ふうふいうふ保宗静ちる住
居ちうこの屋ちくふ世の風人ふりて学ふちう俗語ちうんこ
この聖ふ茶刈ふ住ふを人て学民の辛苦をふひやりて

口のちりくゝと夕日と栗のうちも仏もやゝて化のしるす骨拔
焼き腸を去りて小ふれをたゝトの雅氏とをりていとつゝて
ゝ茶を吟むらと歌をつゝる余ゝ作りるれしものをし

髪さやかまま成さのふ身のわと　芭蕉

此所ゝ苔白の石の平坪ちるを踏くゝこゝて身を去の始
ふゝ文亀寺の尾ゝと云ゝ作者うるをゝゝ文て変て還
俗の体をゝひまゝれうゝ化の拙き実ふ化座
ゝゝ　叔父をゝ白ゝてゝの淋ゝき居よさむ人と
尺ゝゝゝ苔白既幾居ハト呼ゝけゝる座勢乃答を
ゝゝ還俗ゝん千ゝ人ふ対て居居をゝふゝゝ或
ふゝゝゝの人をかくゝふ体ゝて髪ゝをゝを見ゝする
と所ゝれゝん去のふ身のゝゝんゝゝふゝゝて

いつりの法ゝゝと乳を去りすて　重五

髪を苔白の髪をゝを人をゝを尼ゝゝゝて所ゝゝの女ふ
ひ書ふゝて法ゝ去ゝりゝゝ人よまた女拔ゝゝて乳の姿ふ
ゝおのれゝゝ別むつみつゝん和ゝゝ男の為ゝゝん
ゝて仲立すゝ人拔よ伝りすゝゝを誘ゝとゝのゝ幸ニ
髪ゝを蘇ゝれゝゝの変ふ伝りゝゝて今ふ口情ゝゝて乳を
ゝゝ去りゝ拔ゝゝん去ゝふ実の比丘尼の還俗ふ所ゝを
ゝ実の比丘尼ゝん去ふ舊風の去を失ふゝれゝゝ

きゝゝゝゝゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝ　荷兮

乳をゝゝゝ拔ゝゝゝゝゝゝ移よを失のゝゝ人ゝゝん所ゝ
白ゝ法ゝゝゝ法ゝゝ拔ゝ辛殺法ゝゝ京原ゝ一座人ゝゝゝ

乾法の時さむく咲ける　芭蕉

庵ちりの身と附れる梅ぬ李能法師とゝ寄る梵字

ちる〻乃彷彿さ身をも味ふ〻〻　こゝの詞すなく

とのゝ法を白りを乾法のゝ実よ幾ちり

ちる〻ゝひん小米ゝ〻〻　虚家　杜國

什白寄ゝ孤へ〻ゝゝの粧ゝる人の化国柳て世ゝ〻ふ

丈すゝもちて九十九髻の主柳を淡ゝ科て火玄焚

ちるゝさゝちゝれちゝ〻

田中ふるこちゝん柳落るゝゝ　荷兮

ゝゝ金釈の附ゝ柳落ゝ芳白の寄小ちん柳を

白作ちゝん田中ちるのゝ手よ芳い田中ちゝゝゝ云詞ゝ二アヲ

及セハ十トちれゝゝ小ちんゝ柳を伊勢の山田のかとゝ浮沈ゝゝ

ゝよちりと云い七玄搜小遠ゝゝ安を用ひた

雪小ふゝ　引人をちんちゝこの　野水

柳小水辺を附ゝ雪ゝ引ゝ人の御詠のゝゝ人

ゆゝゝちり云二三白わゝ沉ゝ玄一白わゝ作り

ちゝちゝん

たゝゝれを模よちゝ月ちゝ　杜國

芳い伸ゝ白ゝ模小脇ちゝ月ゝ三日月ちゝ

隣ちゝゝ所て下り居る　重五

ちゝ乾を発ゝきゝサハヲ及セハサトちれゝ句ゝゝちゝ所

武ゝ辻子小詠ちゝのゝ住居の遠ゝちる体を月細ゝ玄云

ちゝちゝよちゝ住住ゝ附ゝ

二乃尼小近陽の花のちゝきく　野水

前句の町より下り居る人を岩ノ上居る人とハ付し新し文仕
掛する人の手を引し已り者より立帰り居るをいあり居ハ云
ハり亦五日三日の時を乞ひて帰るをも下り居ト云ひ或ハ者
下り里ハりに成ル父入ると云ふ同一亦ハ云ひ成おろん人
ハも俳位をすゝをゝるを院（ヌリ井）の君と称し者ハるのハり
附ると町ハあり居ると云人を俳所つゝめ掛ると人と云
ると人情を附ゝり二の居ると一箱二箱とゝふ一とゝ其居ハ
右の九ゝ下り居信ゝの俳一さを弱ひて高仕人のむし
を語り出一近傍の花乃葉りいハハおのれ高仕の掛
をしも花人の俳遊掛いゝまゝあさゝるハ今ゝ俳ゝ系
娯楽の差ハてゝ人付ゝ掛掛欲ゝ一ゝさ生余ゝ白
和ゝ語ゝゝのゝし一ゝ掛ゝ例一世ゝ多ゝし

愁ゝ出ゝゝ掛ゝ掛ゝ掛

薄も芦もそなたの俤を面影にうかべて
俤とい芭白乃人のたりし世を哀とて
くちぬるに袖乃露ふかけれ
のたまふ花ゝ紅葉にて芦原系子を見るとなれいりて陸を
薄ふとりて遠八法て沙弥もしくは世の墨衣
人をとりあつめの讃誦をもちくきや沙弥ハ法るに
しなて原氏ふ泉者多ふ称ひ
のり初ふ箔屋遊新おおろふ系　重五
芭前白の人ひてそなたの位を定て除八薄と参るの
袖のそなたぬふを上箔のたるとなく俤ひ箔す
とふよそ人抱をもちなく袖ひ沙弥を
自りをたゝん

今ゝゝみの矢哉ゝゝ声　荷兮
芭白箔千新おろるとの云位を少咎めて此作者
ゝ一曲をふまえ扱ゝ和ひすゝ伺ふ人ひたんとん
俤ひるゝ　ゝ芭ふ俤ゝゝの変化を扱ひて秦乃
豫讓ゝゝ者の俤を報ん為て寸ゝ袖を切ゝる
つけ殺ひゝもんゝ或ハ韓信ふまれる侠者
の木くれよ多ひ居て秦の始皇ゝ車て鉄槌をうち殺ゝ
系俤ゝも逃向をゝて芭白系物の中ゝる人のたりて
箔千ゝふ容ふ恐ひねゝふ出ゝの俤ゝとん定ゝ
今ゝゝみの矢を放つとハ作りゝんけ白よ一社の音を
引ゝて方作者の働ゝゝゝ
用ゝゝゝ

ぬさ人の記念の杖乃吹あれて　芭蕉

矢を放ちとゝろり吹れ〳〵て芳白の孝〳〵を寄り
せ〳〵〳〵と人の記念の杖をそゝの系氣ゆ〳〵て二句の
うつりをゝんをくきく

志そ〳〵宗祇の名をつけ〳〵水　杜國

ゝをゝ芳白のをけ〳〵きゝ正を辞乃に拔ひゝゝ熊坂の猿
魚杖い美濃ゆ行り宗祇の水も同〳〵ゝ正ゝ九ゝもの凄
き熊坂ゝ物乃杖と風流ゝる宗祇のゝ九水ゝの野白ゝる
入し宗祇乃水い美濃ゆ必彩ゝ山田ゝ左ゝ所のゝゝり
ゆゝり〳〵ト七級樓ゝゝり故ゝゝ九ゝよ讓ゝて略ゝ　拔は白の
嘗ゝ千ゝゆゝを孔子ゝゆ傳ゝよ逝者いかゝのゝゝ九ゝ是拔を舍
すゝゝゝに基し墓悪の熊拔も風流の宗祇も今ゝて

名のゝゝと生ゝ必滅の理をゝ〳〵ゝ作ゝのゝゝゝを
拔ゆ〳〵ゝれ

笠拔〳〵ゝ乎理ゆもぬゝゝ小竹雨　荷兮

はゝ白い宗祇の玉水をゝゝゝゝゝゝゝ枕拔をゝひゝゝゝし附ゝゝん
ゝゝに小〳〵ゝれい来ゝの白紙ゝ白ゝ紙ゝ乎ゝ宗祇の白ゝ
世の中ゝゝゝゝゝゝゝ九の玉ゝゝれゝゝゝ見流を
ゝゝし乎理ゆ乎流ゝゝゝゝゝ

名ゝゝゝ乎ゝ〳〵ひゝゝ唐苣　野水

ゝゝい乎ゝ乎ゝゝゝゝゝゝゝ乎理ゆ乎ゝゝゝゝ作ゝ
名ゝれの中ゝひゝゝ唐苣のゝゝゝ眠ゝゝゝゝ白の
ゝゝゝゝゝ附ゝゝ拔場の論ゝゝゝゝい歩銭の宗祇水
ゝゝゝ人の杖ゝ附ゝゝ白ゝれゝ白ゝ苣ゝ生論

[illegible]や初んの恋ひもけんまいてきのてらく作り
[illegible]と碎[illegible]きん人の骨ゝ何　杜國
[illegible]の冷[illegible]た処を附[illegible]

烏滅いろんしの子の玉ゝ[illegible]　重五

[illegible]は芳白[illegible]と碎[illegible]ら人の骨ゝ何[illegible]ゝ白をいく
[illegible]も咲て正[illegible]て人れ[illegible]の晒骨累[illegible]て[illegible]も[illegible]ら
[illegible]ゝ散り[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

香久山の紫雲の下より解て肩板麻と書たるを亦
龜トとゝるすかり龜の甲をもぐ〜裏ゝ生をうけ
ひぐ破の三つある伝説の卦にかりを震の卦と易道に
当てゝ人ゝるすゝみ之ひ有まう龜乃ト説みとゝくを
いまゝ世ゝ生ゝ身のゆ此ゝ所ゝ之れゝ鳥
鉄ゝゝゝゝ国のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

高ゝ仏さの謎ゝもとけ〜　鄙公　野水

是ゝト謎トの対句ゝゝゝ付ゝゝ此ゝ謎
おゝ執ゝゝ〜日待を庚申ゝゝゝの戯を恵ひゝ附
たゝゝん

秋ゝ九ゝ一斗ゝゝゝゝ表を　芭蕉

ゝ孔酒刻ゝ苦白を謎ものゝゝ恵乃物遊ゝゝゝ表

其の叶ゝを付ゝゝまを考ゝ表ゝゝ秋水一斗
ゝゝふゝ手掬ゝゝも板閑ゝ多ゝ一斗の雫ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ書板ゝゝ曲ゝゝ手ゝ
ゝゝ拭ゝゝ

日本の李白の坊ゝ月をゝゝ　重五

秋ゝ斗ゝゝゝ澤伍の雲ゝ日本の李白ゝゝ
詩人をゝひゝゝゝ日本ゝ李白ゝ仏説ゝ
南部詩集ニ日本ゝゝ李白ゝ仏説ゝ
石川丈山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ叶ゝゝゝ狩ゝて板ゝ秋ゝゝゝ詩の好き
人ゝゝゝゝゝゝ

中ゝ本摧をゝゝ琵琶折　荷兮

芭蕉翁の生涯の坊より月ごとに俳諧を作り俳諧を作る人を作る人の世に多くなれば此李白の
ごとくよい歌うたう延しし美作する人の世に多くなれば此李白の
ごとく詩人の意味を解する人あれば亦生涯歩行して月ごとに明
友も美雅なる人なるべしとその人の形容を言うべく中に
本槿とは作りなりてし来りて又槿花一日栄花りつれども生槿を
歩くしても中みさしたさむしたる人乃至象をもつて人(きと)服よ
笠を山笠をもとなるに亦中に本槿いくもつの雑行
引きてもとも根乃山茶をいい弁を好みてさきに狭くなるよい方
すべこうしの吹茶を散らしたるなれば此本槿を
混じて海すべうすす
うしの詩とつて幽草乃夕べ哉　芭蕉
此句或人の解に古言に大人をうしとなるを大人乃

弔ひて牧童の法師の扮に跛毫法師の扮に集りて作る
ものとなるに一説あり用ひて牛を伯名にて牛を
牧童にて毎年なるものなるべし大人の弔ひは
乃夕べ哉の一字納きて苟白い跛毫の職人なり
夫を跛毫法師といいなるすべいなるべく
なるべく白い苟白の跛毫なる中に本槿を持て陰を乃
冥を冥まるる乳一豊なる人なれば作る
牡丹は老人の風流なれば作るべし牛の強きを乗り
て京都の方へ向をとりて牛に附て
牛に牛に附なれば夕べの家にて乃ひ失なるに例に
角のもの丹キ刈て本槿の白ひて成れる弔に白化

[illegible]牛を葬[illegible]の住し
さ程遠からぬ所の[illegible]の[illegible]の[illegible]
をとゝのへられ[illegible] 亦大和物語に南院の[illegible]牛を
惜りて半[illegible]又の日かりにやりてれば牛死ぬきとゝ[illegible]
我家にしるをしらしとやゆゑ[illegible]の命を
かるゝ[illegible]

蕃ふ鱉乃魚 或いくさ 或 杜國

此白ちゝの人乃毎ふ牛弔ふ[illegible]を鬻きもの異南人
[illegible]
いさゝか[illegible]南人の[illegible]乃代[illegible]此ふ
んを用ひて解[illegible]
乃[illegible]

[illegible]の苦しう祈をしもあつ乃のさよた
迂しらいさゝ[illegible]て上総房州の浦[illegible]
[illegible]浜沖に生魚をとん供[illegible]
同九年[illegible]浦の市[illegible]出して[illegible]の代より[illegible]所化
乃[illegible]
[illegible]て魚に戒名[illegible]
の寺院[illegible]門乃塀或[illegible]梁[illegible]
[illegible]に彼生魚に戒名[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の辻堂[illegible]郷中の牛乃[illegible]失せ

名弘年忌抑の弔ひよりて生わらの浪人ものたち
ひとりゝ供佛報恩の誉をなさんを附るゝ
抑て奥州ふいりゝて笑をよりてくゝ作りたゝん　牛よ
陸さて行きゝと死せる実多き中ふ生ひたるを
近傍泰山公殿下の初りて木幡の里みあるゝ牛ゝ病
つきて行やゝと死せるるゝ行いよ十九も出て百姓を歎
きゝるの殿下の伴耳より不度ふゝめ彼ふの百姓
をめゝて生行ふ氏神抑の行るゆいるる神をの祀ると留
るくい村のゝゝるゝよ抑の明神とゝふき社乃作るゝ中
よるゝをやゝて抑ゝゝて陸ゝゝて陸ゝ一をゝ九ゝ我かの社よ
納ちゝゝゝ生伴ふ行ゝをゝる抑の神ゝゝ生する
をゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ根社ゝゝよ明動ゝゝゝ

翌日抑の牛ゝも皆ゝのゝゝ起ゝるゝゝゝうゝるゝ抑
世ゝゝ多ゝれゝゝ牛の年四ゝゝん供ゝゝの体を附ゝん
う

いのゝゝ行きゝゝ日乃ゝゝ　荷兮

芋白奥ゝゝゝゝゝ詞をゝ答ゝて古ゝ女の物抑ゝ白
ゝゝゝゝゝゝゝゝ山ゝゝゝゝ恵ゝ一肩ふ歩行ゝゝゝ行ゝて
ゝの禁ゝゝ女業ゝ抑ゝゝゝ小京女八陸をんゝゝ
ゝ行ゝゝ抑て孫女ゝ宗彩成ゝ倩ゝの影ひゝゝて
加ゝゝよゝゝゝゝ作ゝゝゝゝゝゝゝゝて押出ゝて
女ゝゝ附ゝゝ　此経(ソナヘ)をコノヒロトゝゝ苦ひゝゝの苗貌(ミヤビ)ゝき
姫を抑ゝゝゝゝ女の宮ゝ世ふ影ひゝゝと国ゝゝ及
ひゝひゝゝゝゝゝゝゝゝ

うを焼よ告るよいうるゆ焼隆ウまうクれを義詩の
さるくし玉ヲの答ノをちをそれ玉焼をと死失ろうとて指を
作りを中よ絶をいれて形辺よ送り一叶の恋りと和
ウ人技くゆりひ玉をれ国ヲ誠ろうとおり一て止み
ともをうして絶(ツナレ)をコノシロくるとをコノシロハよ代乃主
ろうる室八島縁記有ちるよ下野ヤ宮の八幡四よろ物語の
るの代よ絶情ろん或人絶して曰くくトうよ女と附ろく
きたるし妻をを和ろトハ附ろくを言ハるの代とし
るる詞の孫よを和ろと附くをよいくく矣ハをを和る
神の生贄とんるるるくをも故ろ乃れをも祭ら長
略ろく

きゆいいもとのまゆ久をふゆ幾　野水

或人の解よ若旦の女乃妹く妹いををふんとを天よ初て宮を
降くふ妹ちきをふ新も乃て眉ときよゆをト附ろくと
いりををもたくまを乃ろ保ろれをもまりをいをハト
なるいノ一字一向よ解ちなくハ附をを妹も妹も甲一沖度よ
文仕して居る伸とをれウ中も妹ち年も十八九才ヲく
いと小さしくあれ居の沖経を才て及(ヤト)て妹の宛を
集ろんとをを初ろに妹ち年も十四五才ヲていまを世ろを
居くゆををく眉書ふゆさトく抜ろふハト答ろろろる
沖度勢初ろ新て非麦当書の有まのちれ妹いを
乃の当書ヲして眉書よゆくを妹のんをふち妹の眉書
よゆをトちふを附ろを妹の眉書
ろんくをんろて保しハ二旦の恵表ハ伸をろく

綾ひとく居陽よ志賀の浜辺　杜國

眉書よゆくとらふよりゆ陽を附し扨眉作りて地下平人
の業ゆゆゆねらそこに猿の蓆を引過てさはや志賀
乃あらそんなてふそこいろいろとてわのうゆ
綾ひうつれるこそこやひるさまを綾んるて

廊下い苔のうけつてふあり　重五

廊下の半きよ苔の苔をたゆゆひてまを新つてふ作り
半る夏のりのゆうやうる風情と目出て　拳白のす
拳白い頌の言こたこへ遥言の席ゆうも拳白い投こゆ
するこの形ひこそ仏作　芋し　称名院殿二七りの遥言よ紅巴
独逸をして自ひの苔乃苔よゆさを乗る須て年て
月よ添りて拳白今ふゆうのこゆ云苔こそれを

てこ切字を用るは物ふ針しこ苔ふの義之　切字ふを
りふい義白の半ケ言るくんゆ苔よ切字を用白正白とはを
苔しんう苔こ又苔ふりゆ作定すれたくゆ記をゆゆ人
もおのつゆ義白のすゆゆゆれふこ至て初んの半一白の苔
苔ふこそゆゆ如人も切字を用いて白をゆ記けい切字の徒
こして義白のゆゆこゆゆゆ切字を用白一
ふいゆるこ切字ふふを異義初んの作持ゆるふゆ
惟然曰切い節こ竹い節ゆ作る者よ遥言ゆゆれい切い節のこ
しこて亦曰切字い者居よ作ゆ父子ふ孝ゆ朋友て
位ゆこまゆよゆゆゆこ　此まゆふゆゆこのふる
ゆ切字まけふこ切ルこふもんくよ切ルこゆふいゆ秀
支流の別ゆふゆふ性よ切て切ゆこ切字をのゆ記白て

熊〻切字を入さるを　秋風よりあれ〻迄き葉の秋　第
はけ白い杉食嵐葉の遠悼の白と赤黄帰りたるを
塚乃すゝきの穂　第はけ白い出月の呂丸の旅中ゝ死る歌
作り白と解よ黄帰を黄ゝ帰りて一の主ゝ古園
ゝも帰ゝんすを待ちゝ多も帰ゝんとゝいつゝんゝ花
塚よすゝきゝゝ白鎖りゝて帰りて信との詩射ゝり
ゝれよ切字を用ひさるゝ所身を三世の孝孫ゝ花ゝを
切さるゝ故第の徴ゝ性ゝ切字ゝりゝも平白ゝゝるゝり
泉帝を府よ半ゝ女ゝ平白と名月や竹ゝさゝる
村在其角はけ白ゝ始めゝ名月をゝして付白ゝりゝ角ゝ
夜白ゝゝるゝゝして切字を入て名月やとゝゝゝ実よ能キ
夜白ゝゝゝゝゝ刈後編縱集二五ゝゝゝ景ゝ杉風

故ていろ色のゝゝゝも是ゝゝて仕舞ゝとゝるいゝゝゝ
雑ゝ〻茶屋の手ゝを仕年叶もゝの接ゝよモフゝゝ
ゝゝゝゝゝ

[illegible]五斗米の[illegible]を[illegible]
今[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]白は切字の[illegible]
[illegible]切字[illegible]
[illegible]切字[illegible]
[illegible]切字の[illegible]
[illegible]切字の口伝を[illegible]
[illegible]式に切字の[illegible]は初[illegible]を助[illegible]
[illegible]伝授[illegible]
の一氣の動き出[illegible]陰陽の[illegible]
切字を[illegible]物二つと[illegible]

仙化名月を作[illegible]
白の生れ[illegible]白に赤白[illegible]
[illegible]白の平白[illegible]
白[illegible]切字の口伝切字の[illegible]
[illegible]切字[illegible]口伝切字[illegible]
白[illegible]の白[illegible]平白[illegible]
[illegible]切字[illegible]初[illegible]
切[illegible]文字[illegible]切[illegible]
[illegible]九月曰いろは四十八字[illegible]切字[illegible]
[illegible]赤切字[illegible]
[illegible]
[illegible]切字の[illegible]

本式俳諧切字を格字とす格字の切字の多きを主とす今手
切字は發句の格なれば必ずしも切字多紀とせざる
發句の格なるべし然れども無用の長句に
格をなす〜格中に居るは狭〜格外に出づるも
格をなす〜

雲雀より空にすむなり　蕣　乃　食　杜國

發句蕣華を成るさまを雲雀に空を飛ぶを空信
をなして紙を成るの句なり雲より強き成あ
るれば蕣の食は仕官の暇なきが如く朝
寐もなるべしと蕣丹唇を入るる食吟ふとなる
べしと句作の手書をなるべし　和ス角カ蓼蛍句ヲ
蕣を糸に結ぶ〜吟ふ男子邪〜蓼は角の大

酒を寐をいとゝ多くなる白ゐとて蕣の
ゝ花今ゝ〜

蓼の葉まで苦る蝶の羽あれて　芭蕉

山中ゝ花ゝ〜ゝ〜ゝ〜

たちまちのうまれしをきき場を除仲の里とも名ありひよ
さそうん彰ふかれとハ時のうまれ白さそまふ出
帝遊を九重の玉乃事ちうも遠除さ邪辺のさうう
雲をめて玉ふる帝幸ありをあれとうふを
見とふふ〳〵芳しく雪光院殿不破乃冥王初
幸ありのうるとを國司こうをつけく垣弦に新あ
うあ初〳〵うるをとをありてをうさ及の今めさ
うををくいと不無うおり〳〵うるを詩製萬之
て月をををれ板ひさ〳〵をく行ひをふ破の雲雪

麻呂の月袖ふ紹鼓をあるをん　重五

芳白ふ車りとうふ遊人を併をうをう院て時
孫るタくれをるれ神り月きまをたれ

遊ふををりて上古の男子の歯乃少しをうふ
紹鼓を名今ををうふ〳〵白ををうふ遊ふをふ
うをを〳〵をれ白ををれ月ふ紹鼓を時を少をふ
ふ〳〵秋乃りの経うさを含ませ当をふをあり
ろ〳〵

桃園誠為ふをる貞徳の冨　正平

をは一をの接接〳〵をのををを季をうをり
季をうをあをうをを月ふ芳白只月をのをれを
月ふ学位ふ変のをのをを月をを季をうを〳〵梨
附をを方呂〳〵ふをのをを行をのを〳〵答を〳〵袖ふ紹鼓乃
風流ふ〳〵ふり当ふ〳〵はをりひをふ百〳〵貞徳の
冥とふ此答ふをて分のを乃をゆをを行〳〵当咲答を

[illegible]
桃花を手折りて[illegible]
[illegible]仙の[illegible]
[illegible]
[illegible]

作りもの〳〵二百年ゝ足さりしものゝ
ものゝ奥儀抄ゝ日正月を
ものゝ月はゝゝゝ衣を
ものゝ月はゝゝ

荷兮

男

ものゝ男の国ゝゝゝを少
ものゝ実を後世の男ゝゝ

孫さゝけのうゝゝのゝゝ　芭蕉

ものゝ里圃
ものゝ馬覓

おもしろく九月の物好きなるべし。されども捨てがたの望きん田舎の学問して傾城賣女とかりけるを忌みるるものしかれども今修学の志とやてらう忽チ面をあらためいろ恨こ雪の戯り杉山の陰ひけ志の約束をもちして果い者の書ともるべく拙こ云して歩りつるふ今い無もきめ果ニ生れ也さて歩ちまて縁の妨ケいろいろるよ恨ひりしとの作ちるをし叔人偏自他の論ふ五りてい歩誠しのこ注よるくい自他差ふ

しして正れも亦ふりもこ注こ人半ちる白しこも歩誠い田際をこて すきこひこする人とはるのてこれい自りて亦の白し他とこ注ふるありこ注ふ

口あるこ猫をちきる地うこるよ　野水

此白い孫妨こ云ふり此病ちるあるよ人ふ嫌ひれちこひうて
こ疫をちきるよ附こうこんるよ此疫をちきるい口しこ歩
歩誠の白ふり三白一ちこうこ経ちるこしまれこ歩
誠こ注才の男こ他をこしまれ他の白こちるここの
疫をちきい自の白ふりて他の差ちるこ差ふこ雑
を近ちこ

口ふり差こちるこ紀ふ首送りきん　重五

此附い一粥しして歩死きんこ子ち勇者のきこ誠作ちこ
附こいこ体帯ふ大好ちる人の一我ようち屋て望乃
軍こ必定歩死ちこ差ふ悔を極メこれい此首こ敵の手て
法らんこちよつけてきるこ紀こふ死首のこ名しこ紀ふ剣
系こい大ちる疫のちれい歌方の咏りをいふ中苦ちり

能大将の病気の人若しくは臭気を厭さんかたのふ
所に薬を煎ぜしめらるる例もかなり我腐のかなしく
口惜やと附そへんは此附寄死のひさまにきふの腐をおし
く扱ひ捨いと無なり

小三たに盃とりせひ　芭蕉

是は他の白雨して笠なき旅人せんとてかり宿の酒をもとめ
附そへり小三たとは後ちまなびきなれこうれの岸傾ふ坊を示
すれとかりに仕なしたるとしるべしとは
戦場に向て身を忘れ勇者当りて生死動せざる示
ふをもんもんしるべし古い大国記の梁冠の寄死ふは平記の村上
義信の討死の附おもひ合せんもおもしろし

月を逆てつれ　牡丹ぬすむ人　杜國

変ふい変化をかりて風雅なる体を附そへ芳香酒香を
うしひ居るさまをかりれば他の牡丹を盗ふゆゑふいかく
て五秘蔵の牡丹を人ふ盗まるまをたのしむ遨遊の
体をうの好事無奥なるべきかの月ハ逆れるとふ附
たりんは他の白ふして酒香なる人を結ふ附
なるべし

縄あるべかりける花の春　重五

変ハ牡丹の場を附そへるべし古文愛蓮説ふ牡丹
花之富貴者也とかりて牡丹を富貴なるとも謂れハ牡丹
の場ふハ金屋玉楼とも作らんふ文ハ俗の千駄一統を
作ハ変ふいかなる家を思ひ寄ふ彩ハ俗語のなる
を世の中の変化とかるべし

ちりくることの葉を地蔵切　町　荷兮

苔白の壁に植破れる仮屋ひしき町をもれる石垣の
さゝなかりしくちらふるこゝを限りさぶもえろくきと

初雪の世にやゆかの嫁のいろ　杜國

笠をとゞめ切町を通る人を附て夫の中ゆゑ笠炬燵
眼をとゞめをる人出して附り例きひきを集ふ入
辻ふ辺訪の涌陽の中ふるそこの辺の中ふ眼をもも
のを一人見ふ中ふもせいのうゑ山伏を後附れ
ちふ笑しうゑ初花の世ハをきうゑ嫁しつき
たる女ふて五月雨の笠やうをいうめくよ
いふるくし白ゑ六人もちけふ花い飾りておのゝ盛
を人て振舞ふきうのくとり花を風しちくし

うふ行いくゝふ乃妻をうゑ中幾　野水

附ゝこい金ふの焼のおゝふ嫁ゝちうゝ名さて
寒焼もいくゝの夫をうさゝゝんたのくく嫁ゝちうて人ゝ
ふゝゝ中ゝ三ん子をゝふ新をゝちふさもたりちんちちよ
遠き月りふくし古おり　這人ゝたてい歩めと子を
あふ五月ふ作をゝ乃ゝ老をこ千九ゝ　柔ハ小女の老乃ゝ

梯をゝに餅すゆる孫おのうゝ　荷兮

柔ゝをゝり傾城の玉ゝ附ゝり梯角鏡ゝ玉ハ人て女の
市ゝ玉ふ九ふ傾城ハ妹ゝんふゝくきゝの九傾
ふりくし付白の業すふふ季の扇ひ玉おゝゝふし新て
季いゝれゝやゝに恨ゝぬやゝふりゝゝのゝれ作者人を
月ゆくきすふゝて付白ハ正月も天日ハ三日付新ふしてふの

かうとうのみ野ゝ草をとりて一日すゝぐこと
して涼しき夏のあやめ水なるべきこゝろ
こゝひさて起こし帝燭とかゝしゝ　芭蕉

芋茎白の国の銅瓶とゝ附ること孤燈とりてこゝろ飯を
さゝ出して芋を銅の瓶よりゝ時をんとするふるを竜乃
御水火とりしてるむ故歟きて力故出くるゝるゝ
芋茎の皮をとんて花の皮のゝりとゝひゝ餅を啄むゆ分
絃とゝの肉ゝくのりて陽春のめるゝ花のつゝゝ
るゝ月しゝくかゝの丶ゝ熱とゝるゝに皮をとんて餅
銅を茎とゝ花を花ゝ銅とゝとゝ出ゝる銅とゝの一件
と芋白の兵の白ゝ月ゝ水帝燈とゝとゝきゝ芋茎
芋ゝ月時ゝを附ゝゝ花ゝゝ

篠ゝゝ柳ゝを柿乃夢さゝし　野水

炎亦季ゝゝゝ月ゝゝ芋白の芋を作ゝ芋ゝを
附ゝ月熟柿の白花とゝ月柿の夢ゝゝとゝゝゝ
休しさゝ月ゝ

三線ゝゝん不破関寒　人　重五

芋ゝ篠ゝゝ柳ゝの芋ゝゝゝ不破の関をゝゝ
寒ゝゝゝし不破の関ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
もゝゝゝゝゝを侍の物好しゝ侍ゝゝこ味ゝんとゝ
ゝゝ作ゝゝ

芋ゝゝゝ芋流て打ゝ碁を忘ゝ　芭蕉

芋ゝ芋白の三味線偽しゝゝ人ゝゝゝ月ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ白のゝゝゝ破

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうなるのりとり業平の孫よゆくすゑのてやすつ
ねてきのふとかふに思ひさりなくなる蕉門の風雅に孫の
なをもとりたれたををくに人を諷誦して仏のなをもとり
しるに代々をいとなる一今の世乃人に分をもらく詩を作り
俳諧をたのしく楽に奉ふ少なの孫書の語をも歌きいを
さつ筆をるふるつさられに珠数をしを手ふるこに後の世
乃所法すれに文言ふゆゆとんなく孫のなをもとら
なに後世ふるに人をとをふ風雅ふ
ろ俗とこに笑ふくきく拝風雅とらふに学迅速をとら
なに後世乃世のるんふけるとて風雅とらふに故
爺はとり初の爰白ふもなの人なに九ふ後の秀句を解きん
十るふ学迅速をとれてにらもなをなるる雅

いさりへ一伊勢とる原氏との俳諧もを後するふに仏乃
なをふとてきとうに筆をるたを張に学にるるにや孫のなをを
学とふるとよ

元とんの傘乃下　等うきに　荷兮

なに芳白の今を宝ひとる人の四さふ久をもく雨降一なを
るとの附るる一にたまさの人のをとりさに

蓮池ふ誘るの子孫夕まるく後　杜國

学に芳白をるとをとんく夏季を附とる冬秋の白と
たとに手つとる落葉をす後　野水

なに五辺ふ紙濂と附とる落やとハ世とるとを落紙の白
鍬りるる一

月ふたとるを原の梅の数乃赤枯く　荷兮

芭蕉庵人の姿と芳白をつくりふる仮をろんれ
機人ゆえいかるべし芭蕉好法師もかの紙帖をもて遊戯す
たりしとかれたる人を用ひて庵を編とし作りたん
りさん一トくわりかるる人物をるべ編トいへん鬢の
ゝくるるもているゝしくるるく米ゝるく数の油も用いされ
ゝるかるるるん中兼の人乃数ハ只るるくちきとく
鬢のゝゝるるゝ中を数ゝるゝゝるるるるゝゝ紀
ゝ月ハ庵ゝのるるるゝ

庵をもきれゝゝ臨済をきり　芭蕉

芳白を編トゝるる中兼の人物をるひようゝ数の赤
るれゝトゝゝ中老女を付るる老女ゝゝられゝゝ悉ゝ
砧ト作るゝ中誇玉砧ゝ　婆子焚庵之話則老女禅那

中庵ゝゝ陳海の侍を出ひるゝゝ玉侍の悟を技人
ゝ小女をゝゝ侍ゝ玉茶の侍をさゝゝ即今一問曰
正當恁麼時如何　侍答曰枯木倚寒巖三冬無暖氣
玉付婆子徒二十年来俗漢養ゝと侍を追拂ひ庵を
焚ゝるゝゝ老婆をも付ゝん

秋海棠のゝゝ平ゝきくゝゝ　野水

付句陳海を待ゝゝるる移機をゝて悟をの付るゝ
一休禅師の歌に関の表ゝ中ゝ月のうゝすの影きけいせ仏生
乃父ゝ玉ゝ　庵是別ゝ色玉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きくゝゝゝ即悟を所性ゝ禅語曰大海降看霜乎答曰
空蟬声渭乎ト者ハ即刹那生滅生而即滅滅而即
生　ゝゝ生滅無始無終性ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

生死示くのごとし　悟を敬性の雨を附こんを

茂の実つゝしを毎年かんもち　重五

芭白の葉さんとつゝをうち被て茂の実つゝをふと二白一三を

て葉のうる容を附うゝ無ゝゝ茂白手ホ茶ホうゝゝる

叶ん二白一三を

村より吹をひゝき山うけて　芭蕉

茂ん実桜のゝゝホ茂の実の雫落ると二白一三を附ゝゝ

三を二白の場を定ゝう白ゝゝ村下石上を栖とゝて山川の

美系を抱ゝゝゝゝの人を附ゝ　を山うけホ寂寞とゝて

ホ葉を楽ゝゝ桜吹を取ゝゝ茂の実つゝホ雫を

やうけつゝん

ひゝうい無侍の肩う内侍　う　杜國

茂白山ゝまを吹をひゝく体に移ゝて旅人を移ゝも袂う吹

をひゝくゝと云ゝ詞ホ山乃旅人ゝに乃ゝまを分

枕或に俗詞形称ゝゝて例のゝ服一袂ホゝゝかゝ

取ゝさんとゝ然ゝきゝ人ゝうゝホゝゝ移ゝゝ移ゝゝ内京

上蔣の孫ゝゝんゝゝんゝゝを風俗のゝゝゝゝ肩う内侍ゝ

狩ゝうゝ乃ゝ千ゝゝゝの口ゝホ咲千ゝゝ多ゝゝ

こりの花野葉乃ゝ乃ゝ乃ゝ　重五

茂白肩う内侍ゝゝあゝゝの女官並肩う体ゝ肩ホ禁ホ

京の八幡合をゝひゝゝ　紀事曰禁裏清涼殿南階

前有闘雞其雞諸家中雲客被出之仙納弥市預

此事決勝負

ゝゝゝみいゝゝ也越の猶活刈　荷兮

をゝゆゝ様ふ方ゝよゝ国ゝの産物を貢ぎる代を附ゝう毅の
物活刈ゝ貢キ越ス乃熟語多ゝ〳〵芝麻白ゝれハ祝
云ふゝ乃ゝ〳〵百代のさゝを附ゝうとゝゝかゝいゝゝたゝハ白
髮の老爺も悦ひゝ〳〵貢を奉ふゝゝゝゝゝ〳〵芝民
百姓丁懷きたるいゝ〳〵自出ゝゝ記清代ゝとゝゝ〳〵